



心のかよう指導

四、指導の経過

指導の経過を 表1

「運動機能向上のために」表2「コミュニケーション成立のために」にまとめた。しかし指導の過程は必ずしも表の順序に従ったものではない。特に重度・重複障害児の場合、健常児のような段階的発達が困難である。常にあらゆる可能性を考え、表に示した学習内容を重複してくり返し指導した。ただ「トランポリンにのせる」という内容は、自閉的傾向の強い本児と教師の

表1 運動機能向上のために

区分	ねらい	指導内容	反応の順序	評価
トランポリンにのせる	・情緒の安定を図る ・教師との人間関係をつかむ	・ゆっくり全身を動かしてやり精神的満足を与える。 ・体に触れる。 ・動かした方、姿勢を変えながら話しかける。 ・たくさん話しかける。	・常同行動をくり返す。 ・二か月後をはじめて声を出して笑う。 ・動かしてやると静かになっている。 ・教師の顔を見たり手を出す。 ・手をはさんでたたいてやるとじっとトランポリンに近づき始める。	・ゆったりと落ち着いた様子で十分待つ刺激を受け入れようになった。 ・はじめに笑顔を見せたときから少しずつ教師の働きかけを受け入れるようになった。
つかまり立ち	・全身の筋肉に緊張をよせ、 ・広め、 ・わずかで視野を	・全面介助で立たせ立つ事 ・慣れさせ、物を置く目につくこと ・興味をひく力を育て立つ時 ・所におき自力を覚え立つ時 ・介助の力を加減させ立つ時 ・足の力を加減させ立つ時	・教師に全身を寄りかかけ立つようになる ・介助の手をはなすと後方に倒れる ・腰の一部をトランポリンの枠にあて3～5分立つ ・姿勢が崩れそうになると自分で整える。	・わずかな時間でも立つようになる ・介助を受け入れるようになった。
フロアカーにのせる	・下肢運動の自発を促す ・動く楽しさを味あわせる	・仰臥位でせ動かしてやる ・壁や床をけって動かす ・手足を介助する ・手を引いて動かして下肢運動の自発を引き出す。	・のせるといやがりおき上がる ・動かしてやると笑う。 ・介助して下肢を動かしてやると下肢に力を入れ抵抗する。 ・手を引いて動かしてやるとじっとしている。 ・のせると手をつかむと引く。 ・手をつかむと引く。 ・手を引き動かすと下肢を自力で屈伸する。 ・時々床をけり自力で20～30cm動かす。	・引く張ってほしいという動きが ・よむに自ら手を出し見られるようになった。
つかまり歩き(歩行器使用)	・歩行を促す ・行動や経験の幅を広げる	・歩行器にのせる ・歩行器を動かしながら両手を出して交互に前に出させる ・歩行器を動かしながら両手を出して交互に前に出させる ・歩行器を動かしながら両手を出して交互に前に出させる ・歩行器を動かしながら両手を出して交互に前に出させる	・歩行器にのせるといやがり返す ・かん高い声を出し泣きわめたりする ・両足を縮めてぶら下がりがなくなる ・常同行動をくり返す ・不安定だがなんとか足を踏出す ・歩行器を使用して12日後(指導開始後半年目) ・歩行器を押してやると約10m 4分位で歩く ・歩行中はほとんど常同行動をしない ・自ら歩行器をわずかに動かす	・歩行器を使用して12日目目 ・この学習内容が驚いた ・理ではなかったと考えられる ・つかまり歩きをさせる ・歩行器を動かすことができる ・歩行器を動かすことができる ・歩行器を動かすことができる ・歩行器を動かすことができる

表2 コミュニケーション成立のために

物とのかかわり	・手を高める ・物に触れさせ	・ボール・楽器等色をはっきりとした物を与える	・物を与えるとき指ではなく、はじいても音の出ない物には投げける。 ・木琴やシンバルに興味を示したときと10回位たたき耳や鼻を近づける	・木琴やシンバルははじいて音がでないためにバチでたたいたくのかもしれない。他の物に対しては、はじく以外の反応が見られない。
音に対する反応	・音を受け取る ・音を速度を刺激と親	・驚かせないように楽器音や音楽(テープレコーダ使用)をきかせる。時にヘッドホンを使用する。	・大きな音に反射的に驚き音のめりになる。 ・音楽をきかせる時とかん高い声を出す。 ・ヘッドホンをかけて音楽をきかせる時と「えーん」と低い声を出し膝立ちになり体を振る。時々笑う。	・ヘッドホンをかけて音楽をきかせる時と「えーん」と低い声を出し膝立ちになり体を振る。時々笑う。
コミュニケーション	・自分以外の人を認識し、人を育てる	・学習室への移動の際に抱く。 ・いやがらない範囲で体に触れる。 ・わずかでも人を意識する行動がみられた場合は必ずほめ、こたえてやる。	・体に触れると避ける。 ・名前を呼んでも反応しない。 ・抱いても常同行動をくり返している。 ・教師と視線が合う。 ・教師を目で追う。 ・名前を呼ぶと振り返る。時に笑う。 ・教師に両手を出し抱きつくと両手で教師の肩につかまる。 ・教師に手をさし出す。	・発達段階が低いためカスキンシップが対象児にとって過度な刺激となる。 ・人や物とのかかわりの中であつたがだかだか受容してられる。

五、考察

人間関係や指導のきっかけをつかむために最初にとりあげ、一年間継続した。トランポリンの上で、人とのかかわりがとれるようになった後、トランポリンにのせる時間を次第に減らし、少しずつ他の学習内容を導入した。

入学当初、常同行動と自傷行為をくり返すだけの本児からは想像もできないようなさまざまな変容があった。本児は、指導開始後六か月目から目だつて変化した。この時期は人とのかかわりがいくらかとれてきたころである。その中でつかまり立ち、つかまり歩きを行ったところ非常に速く大きな変化が現れたと考えられる。このことは教師と子供の人間関係が教育の根本になることを教えているものと思う。今後人とのかかわりをより確かなものとし、精神的満足感を与える中で持っている能力をじゅうぶん発揮させたい。次に自発性の問題である。どのような子供であってもみずからやろうとする気持ちを育てることに、学習もより効果的

になる。あらゆる方法で自発性を呼びおこすことも重要だと考える。また本児は、指導開始後十一月目到大発作をおこした。その後抗けいれん剤を服用している。このためかこのところ生活全般にわたり活動が低下している。学習時は以前ほど活発でなくなり特に体を動かすことをいやがる。今後このような状態が続くものと考えられるが、医師と密接な連絡のもとに可能な限り、現在までの指導計画にのせ喜びを感じさせるような方法で指導を続けていきたい。